

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	今井瞳良
論文題目	団地映画論—居住空間イメージの戦後史—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、団地が登場する日本映画を分析の対象とし、戦後日本の住宅、生活、家族、ジェンダー、メディアの歴史のなかに映画における空間表象を位置づける試みである。本論文は「団地」を「日本住宅公団が建てた集合住宅」と定義し、映画という視聴覚媒体が人間の身体的・社会的実践を描き分節化する「居住空間イメージ」として団地映画を捉える。本論文が跡付けるのは、このような「居住空間イメージ」たる団地映画のテキストが、メディアによって構築された団地やその住人をめぐる言説との間に齟齬を生み出していることであり、ここに社会批判としての団地映画の可能性が浮き彫りになる。</p> <p>第Ⅰ部「「憧れ」の団地」は、高度経済成長期において「憧れ」の生活を体現していたはずの団地が、同時代の映画においては必ずしも肯定的に描かれておらず、サラリーマンと専業主婦から成る核家族による戦後的な生活に対する両義的な反応を分節化していることを明らかにする。第1章は、主要登場人物が団地およびサラリーマン的生活を拒否する『喜劇 駅前団地』(1961)と『下町の太陽』(1963)に、戦後的な新しい価値観を担ったサラリーマンに対する批判的なコメントを読み込む。第2章では、戦前の「家」制度の民主化として必要とされた核家族に合わせて設計された団地の間取りと住まい方の実践の齟齬に着目し、川島雄三監督の『しとやかな獣』(1962)が焼跡の記憶を出発点として、荒唐無稽な空間表象を通して戦後の家族規範を問題化しているとの結論を導く。鉄筋コンクリート造で不燃性の団地と戦災の記憶の関係は東宝の怪獣映画『フランケンシュタイン対地底怪獣』(1965)を取り上げる第3章においても主題となり、被爆者たるフランケンシュタインが団地から排除されるという物語の空間構造に戦後批判を見出している。</p> <p>第Ⅱ部は「団地妻映画」を論じ、憧れの対象としての「団地族」から密室で性的不満を抱える「団地妻」へと団地をめぐる言説におけるイメージの転換が起こったことを指摘するとともに、映画テキストがこうしたイメージから逸脱する方向性を示していたことを示唆する。第4章では、ソフトコアポルノの題材とされる「団地妻」の原型を羽仁進監督の一般映画『彼女と彼』(1963)に見出し、子どものいない主婦と団地コミュニティとの軋轢を問題化した作品として論じる。第5章は日活ロマンポルノの団地妻シリーズの第1作『団地妻 昼下りの情事』(1971)と第2作『団地妻 しのび逢い』(1972)を俎上に乗せ、家庭外での性労働や性愛のなかに社会から隔絶された密室からの解放を模索する「団地妻」と会社に組み込まれた「団地夫」から成る夫婦を団地妻映画の定型として見出す。さらに、メディア言説の分析に基づき、これら二作に主演した白川和子が、結婚して本物の団地妻になることで団地妻イメージの起</p>			

源として遡行的に発見されていく過程を明らかにしている。第6章では、戦後史の語りと「団地妻」イメージの関係を批判的に捉え直す。日活ロマンポルノというジャンルを映画史的に再検討し、高度経済成長の果て、団地の密室で孤立し鬱屈する妻というフェミニスト的な批判性を内包していたはずの設定が、ステレオタイプとして固定化され、男性観客の性的欲望の対象として消費されてゆく過程を跡付ける。

第Ⅲ部は団地という空間が映画において持つ「批評性」を前景化する。第7章では、団地を舞台にした若松孝二監督作品『壁の中の秘事』（1965）と『現代好色伝 テロルの季節』（1969）を取り上げる。映画評論家・松田政男を中心として、均質化した「風景」として隅々まで浸透した権力への抵抗として若松の「密室」を称揚する「風景論」が影響力を持った。本章は「風景論」を歴史的に検討することによって松田の理論と若松の団地映画の実践の差異を指摘し、若松は団地をメディアに接続された空間として描くことで、日常生活を侵食するメディア環境を問い直していることを明らかにした。第8章は翻案の問題に取り組み、団地が登場する小説である安部公房『燃えつきた地図』（1967）と立松和平『遠雷』（1980）の映画化作品（それぞれ1968、1981）を分析し、郊外化を具現する団地と農村社会との緊張関係を可視化し分節化する映画の画面に注意を促す。第9章は、団地を舞台とするJホラー作品『クロユリ団地』（2013）を音響と団地という空間に着目して分析し、人間と幽霊の境界を無効化する少女を不気味な存在に変貌させることで、女性を「幼さ」に留めるジェンダー秩序に対する批判となっていると述べる。

このように、本論文は、具体的な居住空間イメージとしての団地映画と線形的な戦後史の語りとのせめぎ合いとして団地映画史を捉え、映画の空間表象を社会的・歴史的な文脈に位置づけつつ、メディアの言説との関係を考察するものである。

(論文審査の結果の要旨)

団地が登場する映画を「団地映画」として分析し日本の戦後史と接続する本論文は、まずその着眼点の独自性において高く評価できる。日本住宅公団による団地建設のプロジェクトが開始された1950年代後半以来、今日に至るまで、団地とその住民については、社会学や建築学の立場から多くの研究が行われてきた。しかし、団地の興隆期に第二の黄金時代を謳歌し、60年代を通じて衰退しながらも大衆文化と芸術において中心的な位置を維持していた映画における団地の表象については、1967年にはジャーナリストによる「団地映画論」が書かれ、近年では団地愛好家による一般書や写真集が出版されて関心を集めているものの、学術的な調査・研究の対象にはなっていない。本論文の学術的意義は、方法論における以下の四点に集約される。

第一に、このように新規性の高い取り組みであるがゆえに、本論文に結実した研究は、対象とするコーパス自体の発掘と同定から始まり、映画研究の外に広く先行文献を求め、方法論を模索しながら進められた。そのため、「団地映画」の定義やコーパスの設定に関してさらに議論を深める必要があるが、新しい研究対象と方法論を開拓する独自性には大きな意義がある。さらに、こうした取り組みの結果として、しばしば川島雄三や若松孝二のような著名な映画作家の作品を扱いながらも、これまで映画研究の主流となってきた作家研究とは異なった有効な視点を示すことに概ね成功している。

第二に、本論文は社会学、建築学、都市工学、文学などの分野で団地について蓄積された先行研究をほぼ網羅的に参照して積極的な対話を行っている。現実社会の団地とその住民についての調査・研究と記述の充実ぶりに押されて、軸足をあくまで映画研究に置いていることが見えにくくなる部分もあり、映画における空間表象というより大きな枠組みのなかで日本映画における団地の特殊性を再検討することが望まれるとはいえ、その領域横断性は映画テキストとその「外部」にある社会的・歴史的事象や言説との関係に着目する映画研究として模範的なものである。

第三に、映画史研究としての水準の高さが挙げられる。本論文は、映画についての先行研究に網羅的に当たったうえで、新聞・雑誌記事や同時代の社会批評やメディア論を中心とした膨大な資料を丹念に精査してこれまで看過されてきた重要な事象を照射し、さらに作品研究においては早稲田大学坪内博士記念演劇博物館などのアーカイヴに赴いて脚本の未定稿のような資料を分析し、解釈に役立てている。

第四に、団地という「題材」を中心としながらも映画テキスト分析においては演出、構図、編集と音響の関係を丹念に描写・分析することで、『しとやかな獣』(1962)、『フランケンシュタイン対地底怪獣』(1965)、『クロユリ団地』(2013)のような、これまで作家やジャンルの文脈で論じられてきた作品における団地という空間の役割を描き出し、刺激的な読みを提示している。

以上四点の方法論上の意義と貢献を確認したうえで、以下では本論文の具体的な成果を挙げたい。まず、第Ⅱ部における団地妻映画の再検討は映画史的にも大きな価値がある。『団地妻 昼下りの情事』(1971)は日活ロマンポルノの第一作として知られ、「団地妻」は今日に至るまでロマンポルノの看板とされてきた。ところが、本論文は徹底した資料調査を行い、アクセスの難しい未ソフト化作品もアーカイヴでの特別映写などを通して可能な限り観覧してリストを作成し、これまで必ずしも具体的なテキストの細部に依拠することなしに再生産されてきた「密室に籠もる」団地妻像を覆した。さらに調査の過程では、団地妻役で知られ

た白川和子が結婚して引退し団地に住むという映画外の事象が作用し、このような団地妻のイメージが遡行的に確立されたことも明らかになった。ロマンポルノについての先行研究ではこうしたメディア言説を吟味してサブジャンルの成立を跡付ける本格的な映画史研究は行われておらず、本論文の新規性は高い。

丹念な言説分析は、いわゆる「風景論」論争を跡付け、それに伴って若松孝二作品の政治性を再評価した第7章にも活かされている。若松は反権力志向の発言から政治的な作家であることが自明とされてきたが、その内実については物語やキャラクターの分析に依拠していた。本論文は「風景論」を同時代の言説のなかに思想史的に位置づけつつ、メディア社会論・権力論として正確に読み解いたうえで、映画のテキスト分析を通して、若松の作品を特徴づけるとされる団地の「密室」の政治性はメディア環境から切断されることなく、接続されていることにあると主張した。「風景論」は英語圏の日本映画研究でも近年注目を集めてきたが、本論文では言説の歴史的分析と映画テキストの解釈が有機的に結びついており、国際的にも大きく貢献する研究成果であると考えられる。

このように、団地という戦後日本の住宅プロジェクトの物質性、住民の住み方、コミュニティの在り方などの変遷と日本映画史を交錯させ、団地イメージの可能性と限界を捉えた本論文は、極めて意欲的な研究である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年2月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。